



なっちゃんが、おかあさんと **おのがわ** のどてぞいをさんぽしていると、

「むかし、むこうの **おくばら** あたりを おおきなみちが、とおっていたんだって」

と おかあさん。

「え～、うそ！ しんじられない！どんなみちなのか？」

「ん～、それはね・・・。はっきりわからないわ。おじいちゃんに きいてごらん」



おじいちゃんに
きいてみると

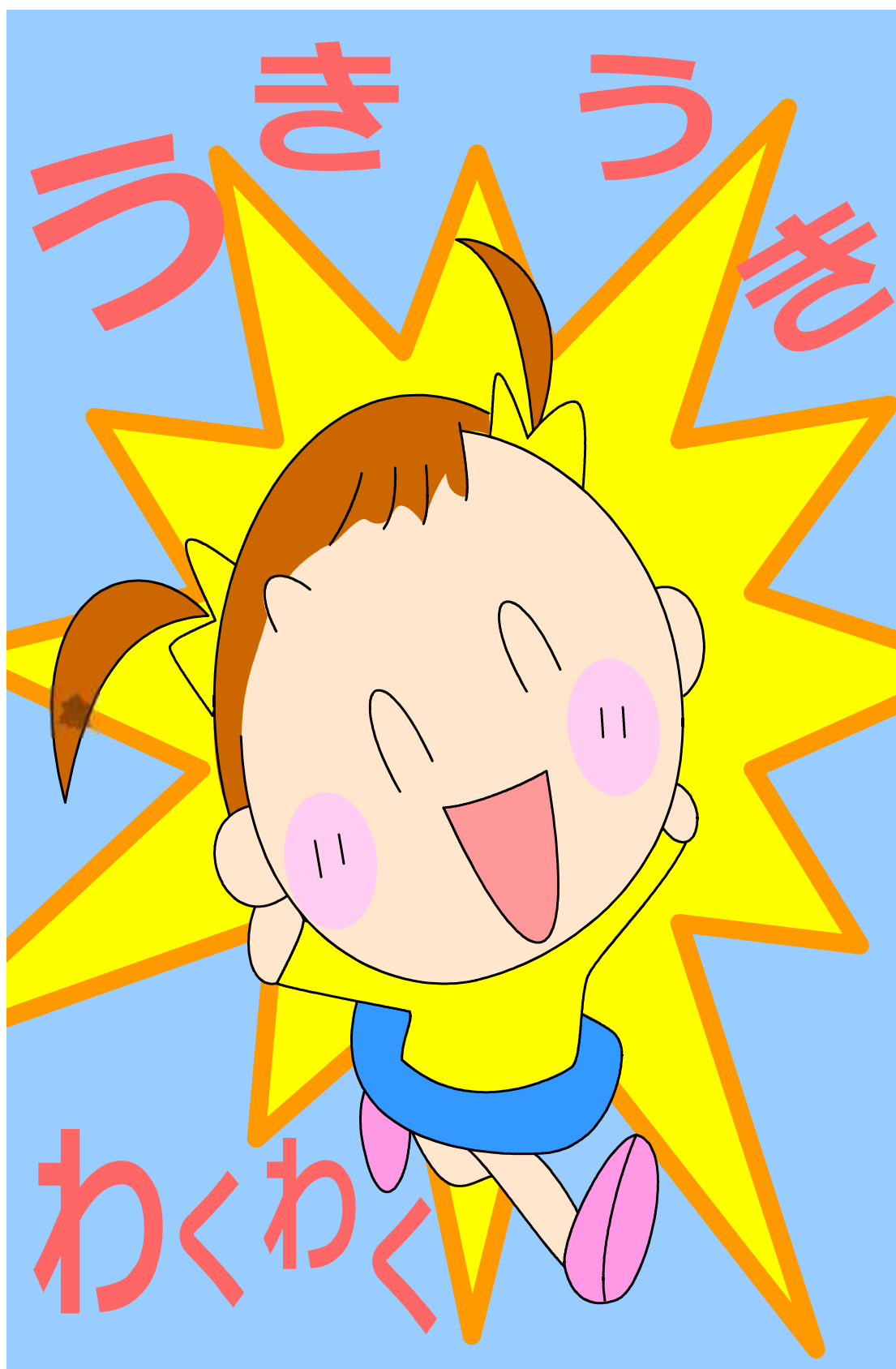


「そうなんだよ。あまりしら
れていないけどね。ここに、
1 0 0 0 **ねんいじょうまえ**、
古代東海道が、とおっていた
んだ。なんでも、**はば 1 2 m**
もあったらしいよ」
「え！ 1 2 m」

なんちゃん、**びっくり！**

「くわしいことは、あきおさ
んにきいてみようか」





つぎのひ。ふたりで、
あきおさんのいえにいった。

あれあれ、これはおもしろそうと、なぜなぜくんが、もりからあそびにきたよ。
どこかな？



わたしは、なぜなぜでーす。

いえにつくと、さっそくあきおさんが、はなしてくれた。むかしむかし。

いまから1000ねん
いじょうまえの奈良時代。
みやことちほうをむ
すぶどうろが、つくられ
ていたんだ。

そのなかのひとつが、
みやこからいしおかこく
ふをむすぶ古代東海道
(東海道をとおり官道) なんだよ。

古代東海道には、陸上
ルートと水上ルートの2
つがあったんだ。つぎの
ちずをみてね。

りくじょう

すいじょう

陸上ルート 水上ルート



このあたり（下君山）に

しだぐんががあったようだ

----- 国境
----- 郡境

—— 「古東海道」陸上ルート
~~~~ 「古東海道」水上ルート

—— 新「東海大道」  
—— 養老2・3年設置  
—— 弘仁3年以後の駅路  
..... 下野国へ支路

## 古代常陸の交通路

出典：地方史研究協議会編『地方史事典』1997年

りくのルート みずのルート

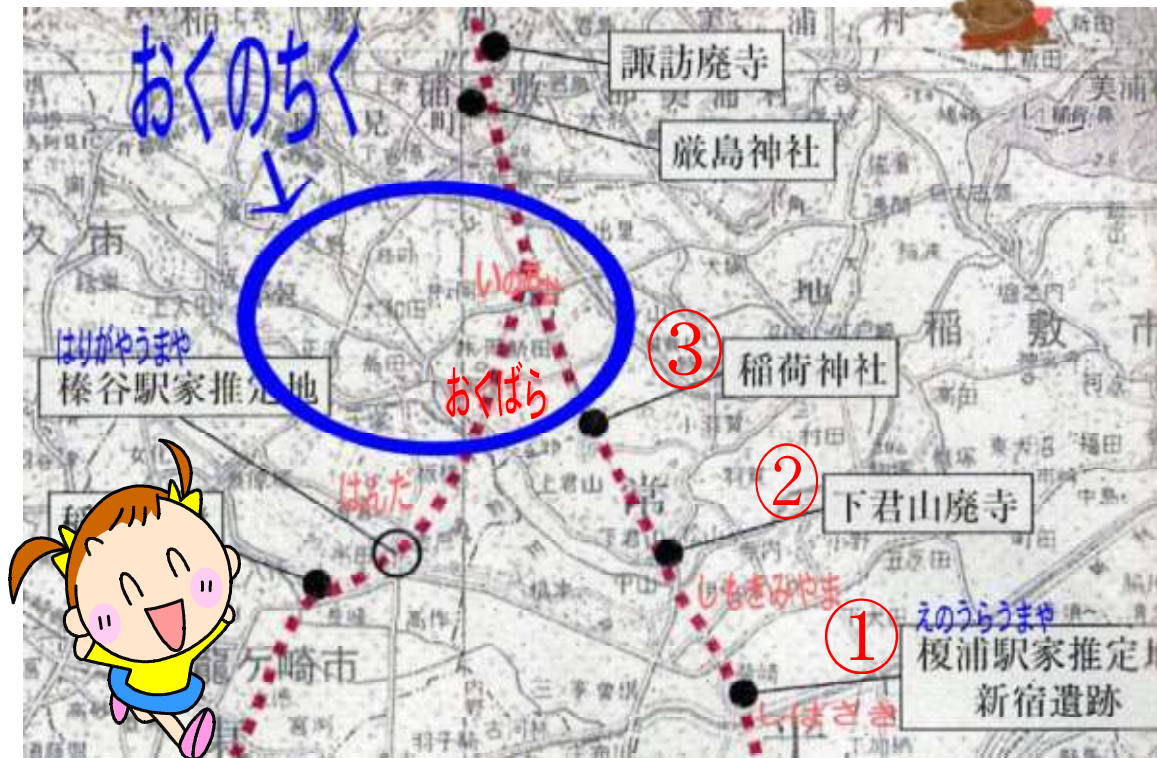
● おくばら（奥原）とこだいとうかいどう（古代東海道）

りくじょう

さらに陸上ルートには、奈良時代のみちと平安時代のみちがあるんだ。つぎのちずのようにね。



いちぶをおおきくしてみると



(古代東海道と古代の道より引用・加筆)

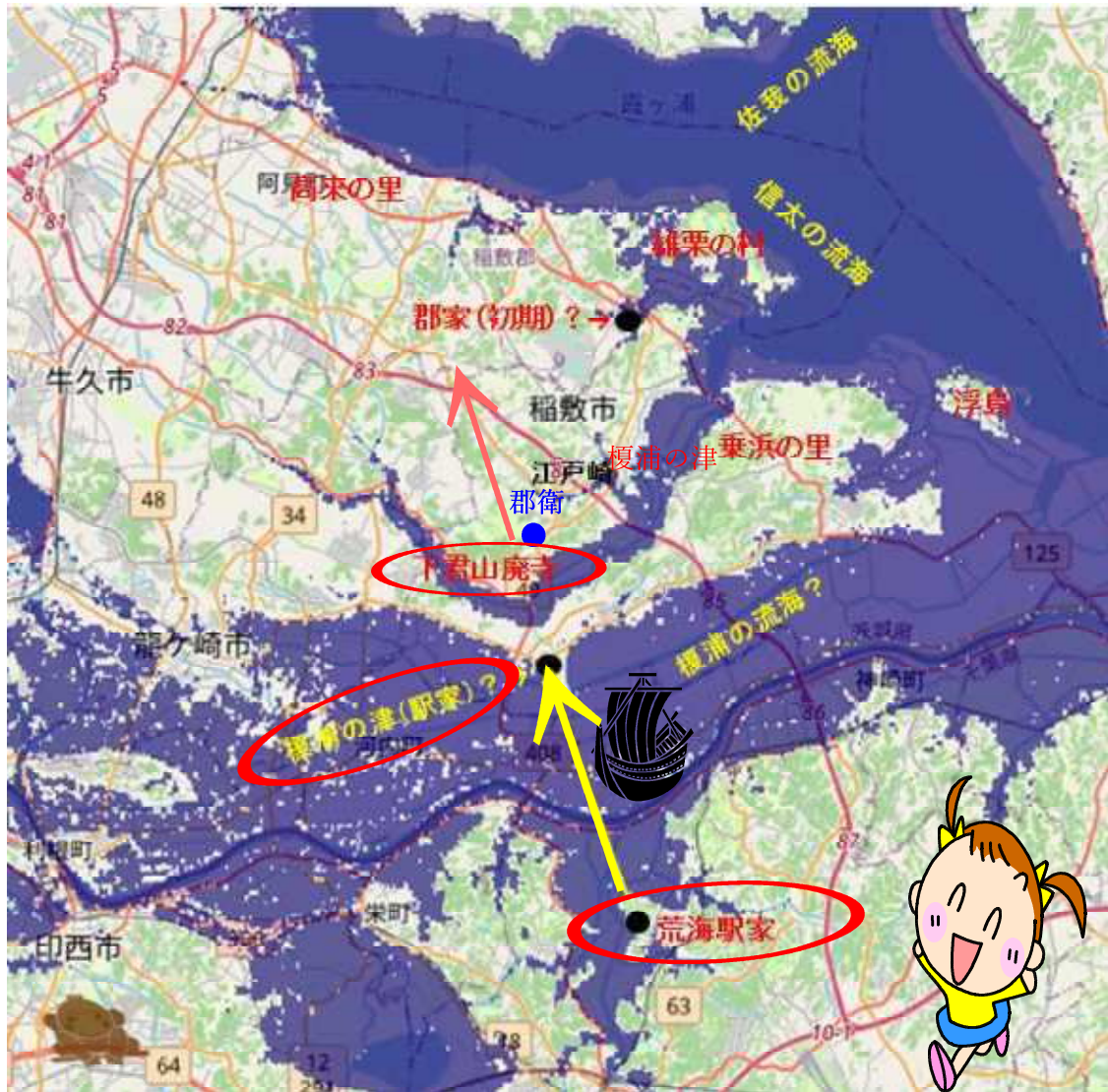
①から③は、奈良時代の  
みちなんだ。①からじゅんには  
なすよ。

①榎浦駅家 (えのうらうまや) (しばさきしょうがっこうふきんに  
ひたちのかに いりぐち うまや  
あった) は、常陸国の入口の駅家  
(駅家は 16 キロごとにおかれ、うまをのりつぐことができた)  
で、しかも、ふねがとめられ  
るみずべちかくにあった。

そこ<sup>し も き み や ま は い じ</sup>から②下君山<sup>し だ ぐ ん え</sup>廃寺。

このちかくに信太郡衛もあ  
ったそう<sup>だ</sup>。

※<sup>な ら じ だ い</sup>奈良時代の<sup>こ く し</sup>国司（やくにん）は<sup>あ ら う み</sup>荒海から  
<sup>え の う ら</sup>榎浦の津にふねでやってきて、<sup>ひ た ち く に こ く ふ</sup>常陸国国府  
（石岡）にむかったんだ。



（まほらの里より引用・加筆）

しもきみやまはいじ

# 下君山廃寺あとは、どこ？



写真中央の竹林中が廃寺跡

[https://www.7b.biglobe.ne.jp/~s\\_minaga/ato\\_simokimiyama.htm](https://www.7b.biglobe.ne.jp/~s_minaga/ato_simokimiyama.htm) で、けんさくしてね。



ここから、こんなものが...

しもきみやまはいじしんそ  
下君山廃寺心礎

・ちゅうしんぼしらをうけるもの。

このちかくに信太郡衛（やくば）が、あったといわれているんだ。

※「信太郡衛」は、もとは信太にあったが、のちに下君山にうつったらしい。

「どうしてなの？」



下君山は、おのがわの水運と駅路（国府と国府をむすぶ官道）がまじわるところだからだよ。



「へ～、べんりなところだったんだ！」

(写真：朝日新聞古代東海道を歩こうより)

そして、下君<sup>しもきみ</sup>  
山<sup>やま</sup>をとおって、  
江戸崎<sup>えどさき</sup>カント<sup>く</sup>リー<sup>らぶ</sup>倶楽部の



にしがわのこみちをとって、  
③稲荷神社<sup>いなしき</sup>。そのさき、げん  
ざいの稲敷市<sup>いなしき</sup>と牛久市<sup>うしく</sup>のさか  
いが、ほぼまっすぐになって  
いて、いまもどうろがつづい  
ているんだ。

そして、飯倉<sup>いぐら</sup>・追原<sup>おつばら</sup>へむか  
うんだよ。これが、奈良時代<sup>ならじだい</sup>  
の駅路<sup>えきろ</sup> (国府<sup>こくふ</sup>と国府<sup>こくふ</sup>をむすぶ官道<sup>かんだう</sup>) なんだ。

ところが、771ねんに武蔵国が東海道にはいったこと  
 で於賦駅家（我孫子市新木ふきん）  
 から榛谷駅家（龍ヶ崎市半田ふきん）  
 そして、**おくばら・いのおか**  
 をとおって飯倉・追原へむか  
 うようになったんだよ。これ  
 が、平安時代の駅路（国府と国府をむす  
 ぶ官道）なんだ。

「どこまで、  
 つづいている  
 の？」

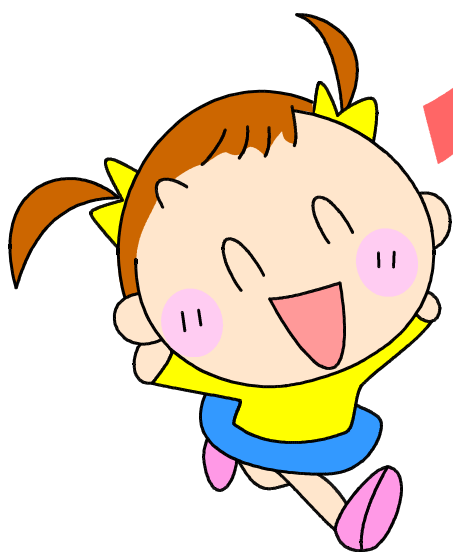
平安京から  
 常陸国国府  
 （石岡）まで  
 つづいている  
 んだ。



でも、どんなひとが、この  
みちをとったの？

それはね・・・

① <sup>ちよう</sup>の <sup>とく</sup>う <sup>さん</sup>みん <sup>ひん</sup>が、<sup>よう</sup>庸（<sup>ぬの</sup>布など）  
や<sup>ちよう</sup>調（<sup>とく</sup>特産品）を<sup>みやこ</sup>都まではこ  
ぶためにつかったんだ。しか  
し、あるきで<sup>なん</sup>何百キロもはこ  
ばなければならず、たべもの  
がたりずに がしするひとも  
いたんだ。



びっくり!

# ぜいきん

そ.よう.ちょう

## 租庸調について

(大人も学びたい！中学生からの租税教育より 第16枚)

かなり負担重かった **租** **庸** **調**

**租** = 稲の3%

**庸** = 年間10日の労役 又は 布 ← 男子のみ

**調** = 特産品



重い税負担の租庸調と労役。

戸籍・計帳にもとづいた税金を  
それぞれ人間がしかり  
系内めるコト!!!!



(イラストで学ぶ楽しい日本史より引用)

そのほか<sup>こくし</sup>国司のもとで<sup>ど ぼくこうじ</sup>土木工事をしたり、<sup>みやこ</sup>都での<sup>ろうどう</sup>労働などにもかりだされたんだ。ねんかん **60 にちかん**もはたらかされたんだよ。

### ※ミニミニじょうほう

**おとこ**は、ぜいがおもいので、こんなこともおきたよ。あわのく（徳島県）のこせきをみると、435 にんで、おとこ **59 にん**、おんな **376 にん**だったところがあったんだって。 **え！ ということ？**

もっとも たいへんだったのが、**防人**（さきもり）。1300 ねんまえころ、**きたきゅうしゅう**にいて、くにをまもるしごとをしたひとだ。**まんようしゅう**に こんな**うた**が・・・

### <sup>さきもりのうた</sup> 【防人歌】

<sup>からごろも</sup>韓衣 <sup>すそ</sup>裾に<sup>と</sup>取りつき <sup>な</sup>泣く<sup>こ</sup>子らを  
お<sup>き</sup>置いてそ来ぬや <sup>はは</sup>母なしにして

（**きもの**の **すそ**にとりついてなく **こどもたち**を おいてきた。**はは**もいないのに。）



かわいそうだ!

※防人<sup>さきもり</sup>も このみちを とおったんだ!

きゅうしゅうまで、なんにちかかったのかな?

② やくにんが、つとめさきにで  
むくことにつかった。

奈良時代<sup>ならじだい</sup>の国司<sup>こくし</sup> (やくにん) は、荒海<sup>あらうみ</sup>から  
榎浦<sup>えのうら</sup>の津<sup>つ</sup>に ふねでやってきて、常陸国<sup>ひたちくに</sup>国府<sup>こくふ</sup>  
(石岡<sup>いしおか</sup>) にむかったんだよ。



③ ぐんたいをはけんするときにつかった。

このみちには、たくさんの  
やくわりが、あったんだ。

そして、ここには、たくさ  
んのひとのあせとなみだがあ  
ったんだよ。

びっくり!



こんなみちが、  
おくのをとおて  
いたんだ！ これ  
は、おくのた  
からものひとつ  
だ！。

あて

こんどは、なにしらべ  
ようかな？

あれあれ？「すごーくたのしかった」と なぜなぜ  
くん。つぎのひみつをもとめてスキップしながら か  
えっていった。



またね

※参考文献 古代東海道と古代の道茨城県歴史の道調査事業報告書